慶 應 義 塾

ISSN 1349-6468

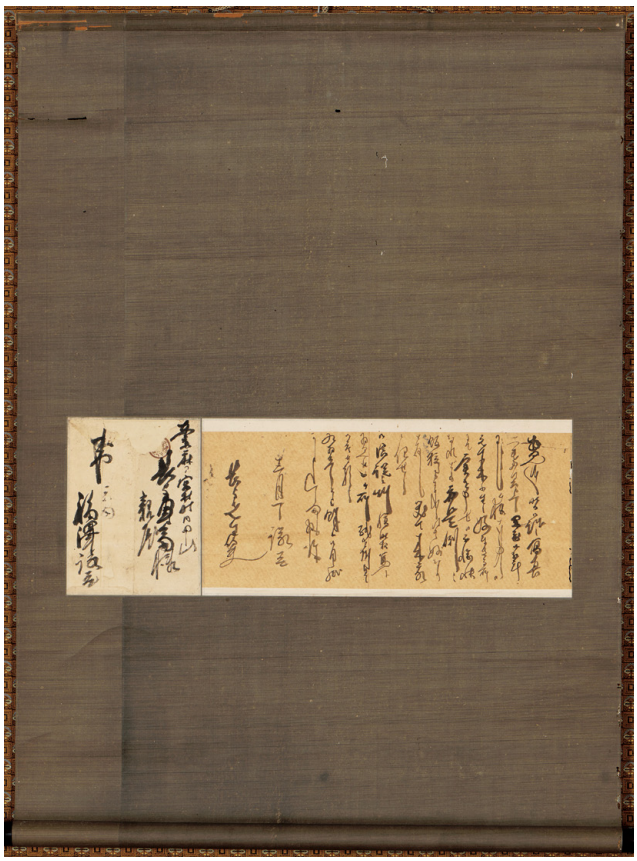
福澤研究センター通信

Newsletter of Fukuzawa Memorial Center for Modern Japanese Studies, Keio University

第24号　2016年4月30日 発行

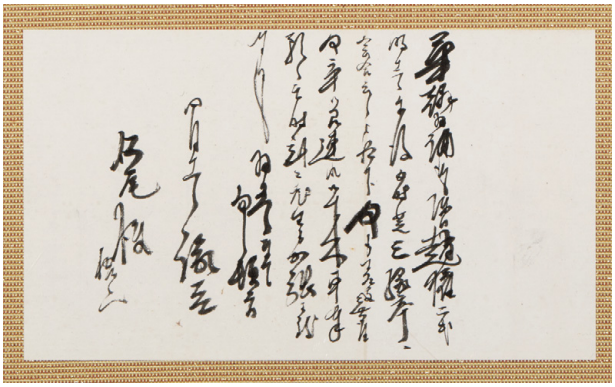
目　次

＊ワークショップ「東アジアの近代とアメリカ留学」について（高木不二・崔徳壽）…… 2・3・4
＊シンポジウム「歴史と記憶とオーラル・ヒストリー」… 5
＊KOCC特別企画展「戦争の時代と大学」…… 6
＊戦争プロジェクト活動報告…… 7
＊大学部開設125年記念行事 …… 8
＊新収資料紹介…… 9
＊主な動き（センターの移転ほか）……10
＊センター諸記録（2015年10月～2016年3月）……11
＊スタッフ一覧……12



長与専斎宛福沢諭吉書簡　明治26年カ12月1日付
【購入】

長与は、明治8年から内務省衛生局長を務めた。依頼された2枚の写真と添削した草稿を送付することを述べたもの。（福沢研究センター通信第23号10頁参照。）



仁尾惟茂宛福沢諭吉書簡　明治29年4月11日付
【購入】

仁尾は大蔵省庶務掛長兼主税官。芝公園内にあったフランス料理店三縁亭での会合に、趙羲淵と権瀅鎮（朝鮮の元軍部大臣と元警務使）を連れて来ることを了承したもの。仁尾は金弘集・朴泳孝の連立内閣で顧問官を務めた。

ワークショップ「東アジアの近代とアメリカ留学」

福沢研究センターワークショップ「東アジアの近代とアメリカ留学」が、2016年3月11日午後2時より、南館5階ディスカッションルームにて行われた。

東アジア圏における19世紀後半からの歴史を考える時、近代化を西洋化としてのみ捉えるのは適切ではない。しかし西洋文明との接触が、大きな契機となったことは事実である。本ワークショップは、同テーマによるシンポジウムの開催をめざし、その準備として企画した。今回は高木不二大妻女子大学名誉教授、崔徳壽高麗大学教授にご報告をお願いし、日本・韓国からアメリカに留学した人物を取り上げた。

■ 近代黎明期の日本人アメリカ留学生

―横井左平太を中心に―

高　木　不　二

本企画は、次のように位置づけることができる。

一九世紀においては、資本主義的世界システムが世界を覆う動きを示していたなかで、東アジアには独自の地域システムが存在した。そこでは儒教的華夷思想のもとで中央に中華帝国として清朝が置かれ、その周辺に朝鮮・ベトナム・琉球などが階層的に位置づけられ、外延部に日本が位置するかたちになっていた。

イギリスをヘゲモニー国家とする資本主義的世界システムへのこうした東アジア地域システムの組込みは一九世紀なかばには完成したとされるが、このときから中国・朝鮮・日本はあらためて欧米中核諸国との関係を軸に、それぞれ自らの進むべき方向と、お互いの関係性のあらたな方向を摸索することになる。それは外交にとどまらず、政治・経済・社会・文化・軍事の分野におよぶ多様で構造的な国家的対応を必要としたが、報告者はこうした動きを東アジアにおける近代化の過程ととらえ、そのなかでも歴史的に華夷秩序のなかで異なる位相をもつ中国・韓国・日本を取り上げて、その対応の内容と特徴を、欧米留学という視点から探る（今回はおもに韓国・日本からの米国留学を扱う）。

さらに高木はそうした趣旨のもとで、三国は、支配領域を接するという地理的近接性と、儒教・仏教文化の影響を強く受けつつ、漢字・漢文を使用するという文化的親近性、さらに経済的にも相互に外交的あるいは経済的交流があったという共通点をもつことを前提に、次の三つの課題をテーマに事例研究を行うとした。

1　比較の対象領域を文化に限定することなく、社会・経済・政治・軍事などにも広げる。
2　欧米側からではなくアジアの側からの視点を重視する。
3　留学生の個別事例から具体的問題点をさぐりだす。

事例研究は「横井左平太のアメリカ留学」と題して具体的な報告がなされ、日本人として最も早い段階でアメリカに留学した横井の動機や軌跡が紹介され、その上で中国人として始めてアメリカに留学した容閎との比較を意識した問題提起がなされた。

ついで、韓国高麗大学の崔徳壽教授から「近代朝鮮の海外留学」と題して、朝鮮人最初のアメリカ留学生として兪吉濬・李啓弼らの渡米事例が報告され、最後に参加者をふくめて報告者からの問題提起を受けるかたちで討論が行われた。

以下いくつかの討議内容を紹介する。

1　アメリカ留学に至る経緯について、朝鮮の場合は日本留学を経てアメリカに渡っている。
2　留学目的について、朝鮮では軍事に対する関心はみられない。清朝への配慮があるのではないか。

3　学問的環境については科挙も関係していて、朝鮮では朱子学が前提となり、蘭学の伝統はない。ただし朝鮮実学のもつ可能性については考慮する必要がある。

4　キリスト教については、横井左平太などは宣教師の援助を得て渡米したが、朝鮮では衛正斥邪論から支配層を中心に拒否反応が見られる。宣教師の援助で留学するのは開国後の1900年代になってからである。

5　留学および留学先については、左平太のばあい宣教師フルベッキが仲介して Rutgers College Grammar school. さらに U.S.Naval Academy へ行っている。再渡米時にはボストン近郊のアレン学校、さらにワシントンD. C. のコロンビア大学へ進む。

朝鮮の兪の場合、福沢が紹介したモースの仲介で Governor Dummer Academy へ、李の場合最初はフィラデルフィアのリンカーン大学さらにワシントンのコロンビア大学に進学している。

6　帰国後については、日本では、左平太の場合は元老院の法制官僚として積極的に受け入れられていく。中国では、科挙官僚としてではなく、既存の体制の枠外に曽国藩など有力官僚の幕僚として活躍する。朝鮮では、両班身分出身の改革派国家官僚として要職につく。

会場ではこうした議論が活発に交わされ、有意義な場となったが、今後の課題としては次のような点が指摘できよう。

(a)　中国からの視点の不足

(b)　留学生を受け入れたアメリカ側の視点の不足

(c)　次の点について、さらなる調査が求められる。①朝鮮人留学生の留学先である Dummer Academy や、進学に際しての仲介者について。②また留学先として日朝の留学先として重なっているコロンビア大学について。

なお討論後、米山光儀氏からコロンビア大学に関して、これがジョージワシントン大学の前身であり、福沢諭吉が慶應三年に訪れた記録もあり、小幡甚三郎が著した「西洋学校規範」にその規定の翻訳があることを記した論文を教示された。貴重な助言に感謝したい。

■ 近代朝鮮人の海外留学と慶應義塾

―兪吉濬を中心に―

崔　　徳　壽
（高麗大学校）

「東アジア三国の欧米留学」は、西洋資本主義列強の武力を振りかざした開放の圧力に直面して、国内市場を開放した危機状況を克服するための、積極的な対応策の一環であった。東アジア三国はいわゆる「同文同種」と言われる地理的・文化的親近性をもとに、1つの文明圏と交易圏でつながった世界であった。しかし、近代化過程に現れた各国の様相は、東アジア体制内での各国の位相および国内政治・経済・文化（思想）状況と関連して、多様な形であった。

本発表では、兪吉濬（1856～1914）の日本及びアメリカ留学過程に現れた国内の政治的背景と留学過程、帰国後の活動などを通じて、19世紀後半の朝鮮人の「海外留学」の歴史的意味を検討した。1881年6月10日付『郵便報知新聞』は、兪吉濬（1856～1914）が慶應義塾に 2 日前に入学したという記事を掲載した。彼は慶應義塾最初の外国人学生であり、また朝鮮人として最初の海外留学生であった。彼は1年あまり福沢邸に寄宿し、留学生活を終えて帰国した。慶應義塾修学中には2編の文章を日本語で作成したことが確認できる。1つは1881年12月28日付『郵便報知新聞』に掲載された「弄筆閑話」という記事で、もう1編はすでに知られている1882年4月21日付『時事新報』に掲載された「新聞ノ気力ヲ論ス」である。帰国後は、『世界大勢論』をはじめとして、「言事疏」「競争論」「苧社輯訳」などの文章を意欲的に発表した。これらの著作は日本留学経験とそこで新たに接した最新知識を朝鮮に紹介しようという性格が強かった[1]。

兪吉濬は朝鮮が西洋国家として初めて修好通商条約を締結したアメリカへ、1883年7月に派遣された使節団の一員として渡った。その後、その地に留学生として残り、継続して西欧文明を学んだ。アメリカ留学時期に指導をしたモース教授に宛てた書簡や新聞記事を通じて、その生活の様子を断面的に確認できる。一方、兪吉濬が留学していた時期、近くのボストン市では福沢諭吉の息子も留学していた。兪吉濬とモース、そして福沢とモース間に往復した書簡資料は、兪吉濬のアメリカ留学と関連して福沢の役割を示しているものと言える。

[1] 朴漢珉「兪吉濬『世界大勢論』の典拠と著述の性格」、崔徳寿、他『近代韓国の改革構想と兪吉濬』（ソウル）高麗大学校出版文化院、2015年。

1894年10月、彼は報聘大使と一緒に日本へ渡って交渉活動を行い、帰国した。翌1895年に、交詢社を通じて『西遊見聞』が正式に刊行された。韓国では『西遊見聞』を出版した交詢社を出版社と理解していたが、福沢が設立した交詢社の目的が「知識交換」と「世務諮詢」であった点を考慮すると、『西遊見聞』著述の意図と符合するものと理解し得る。

19世紀後半、朝鮮人の海外留学は東アジアの隣接国日本、清国とは異なる容態を示している。中央集権的官僚国家体制を固守していた朝鮮は、政府が中心になり官費で留学生を派遣し、留学地域は隣接国日本に集中していた。朝鮮政府が留学生を派遣した時期は、朝鮮政府が日朝修好条規を締結してから5年が経過した時期、いわゆる朝鮮政府の初期近代化政策が推進されていた時期（1881～1883）と、実質的に朝鮮の旧体制に対する改革を推進した時期（1894～1895）に分けられる。朝鮮が西欧国家と条約を締結し国内市場を開放したのは、1882年であった。朝鮮は1882年5月、アメリカと朝米修好通商条約を締結したが、それからひと月後、開放反対勢力による政変（壬午軍乱）が発生した。1880年代初め、朝鮮政府が西欧との交流を積極的に推進していた時期にも、民間では開放に対する抵抗が依然として強く残っていた状況であった。

一方で朝鮮政府は、アメリカなど欧米諸国へ直接留学生を派遣することはしなかった。近代朝鮮の海外留学が日本を媒介として進められたことは、一次的に経済的な面で日本留学が有利であり、またアメリカをはじめとした西欧に留学するための事前教育機関（語学修学の機会）の普及が追いつかなかったという状況とも関連している。特に注目すべき事実は、派遣された留学生はほとんどが慶應義塾で留学生活を開始したという点である。私費でアメリカに留学した学生の場合も、朝鮮内の政治的な変革と関連して日本留学を経てからアメリカに留学した。留学目的について、日本人の留学生の場合軍事学（海軍設立）などに集中していた一方、朝鮮の場合、法律と経済分野などに1次的な関心があった。伝統的な学問分野との連結性の側面においても、日本の場合が蘭学、英学などの発達を通じて西欧世界の学問に対する基礎的な基盤が確保されていたのとは異なり、朱子学的基盤が強かった朝鮮は、西学（天主教）が論争の焦点であった。大きくみれば、このような現象は、朝鮮が資本主義世界システムに編入された歴史的背景の差に起因するものと思われる。

終わりに、最近、韓国内で進められている兪吉濬資料の整理作業に触れておきたい。現在、筆者が所属している高麗大学校韓国史研究所では、『兪吉濬全書』に収録されていなかった資料計2650点をはじめ、テクスト全般に対して詳細な解題を施し、データベース化する作業を進めている。兪吉濬関連の新資料は、2003年に遺族から高麗大学校博物館に寄贈されたもので、書簡類をはじめ、経済活動関連の各種書類と教育活動資料などである。

史料整理と解題作業を行っていく中で、先にも言及したように、兪吉濬は日本留学時期のみならず、アメリカ留学、そして帰国後にも福沢諭吉との交流を続けていたことが確認できる。兪吉濬をはじめとする19世紀後半の朝鮮人の海外留学は、福沢諭吉を窓口にして進められた。兪吉濬の代表的な著述である『西遊見聞』については、韓国内だけでなく、青木功一、月脚達彦など日本の研究者によっても、幅広い研究が進められてきた。しかし、今後も多くの努力を要するものと思われる。たとえば、兪吉濬の思想の揺籃期に当たる慶應義塾留学時期の学習活動をはじめとして、日常的な生活についての具体的な事実などについては、いまだ多くのことが明らかになっていない。慶應義塾に留学した朝鮮人留学生たちが、留学後どのような役割を担ったのかという問題については、最近西沢直子教授の実証的な研究を通じて明らかにされてきている。

また、兪吉濬資料を整理する過程においても、この間、福沢研究センターで整理刊行された『福沢諭吉書簡集』と『福沢諭吉事典』などは、研究資料をどう収集し整理するのかという問題を解決するのにたいへん有用なモデルであった。2015年夏、高麗大学校兪吉濬研究チーム一行は、短期間であったが福沢研究センターを訪問し、同センターの協力によって、兪吉濬の留学生活に関するたいへん有益な資料を得られた。今後も福沢研究センターとの交流が続くことを願う。

＊これは、当日のご報告内容をもとに、崔德壽先生にご執筆いただいた原稿の一部です。全文は、福沢研究センター編纂『近代日本研究』第33巻（2017年2月刊行予定）に掲載します。　（翻訳担当　桝谷祐一）

「歴史と記憶とオーラル・ヒストリー」の活動報告

亜細亜大学専任講師
福沢研究センター研究嘱託　石田幸生

平成28年3月19日、木々の芽吹きに春を感じる小雨の午後、三田キャンパス北館ホールで、本シンポジウムは開催された。当日は慶應義塾内外から研究者が集い、一般公開の教育活動として、近代日本の歴史研究におけるオーラル・ヒストリーの意義と可能性が議論された。戦後70年を機に、歴史研究とオーラル・ヒストリー研究は盛んに学術交流を見せる。福沢研究センターが実施する「慶應義塾と戦争」アーカイブ・プロジェクトでは、今を戦時期の慶應義塾に関する口述資料を得る重要な機会と捉え、オーラル・ヒストリーの位置づけが検討される。進行は、司会で法学部教授の有末賢氏の趣旨説明、上智大学教授の蘭信三氏、横浜国立大学教授の大門正克氏、福沢研究センター准教授の都倉武之氏の各報告、経済学部教授の柳沢遊氏と一橋大学教授の小林多寿子氏のコメント、総合討論、閉会の言葉の順で行なわれた。

蘭氏は、ライフストーリーによる社会学的歴史研究の可能性を示した。これまで満州引揚者、在日朝鮮人、社会運動家等、多様な個人への聞き取りを行なってきた。歴史学と異なり、社会学の研究者は自前でデータを作る。方法論では「どう語られるか」を問う構築主義、ライフストーリーを重視する。「いま・ここ」から「あのとき・あそこ」の体験の語りを捉える意味を緻密に考える。集団に規定された語りと、隔絶された経験に即した強烈な語りとの間の違いや絡み合いの考察などにも重きを置く。

大門氏は、オーラル・ヒストリーによる歴史学的歴史研究の可能性を提示した。過去の聞き取りでは、モデルストーリーを誘導し生じる話の制約に限界を感じ、後に語り手の話に即した聞き方に留意した。また聞き取り資料を再確認すると、ノートは聞き手の関心で整理されていたが、テープでは話が語り手の生き方の中でスムースに繋がっていた。引揚過程の聞き取りでの沈黙は、当時の苦難が今にも続く苦難を意味した。いずれも対面的オーラル・ヒストリーの特徴である。実証主義と構築主義は二者択一でない。聞くことに社会学と歴史学の違いはない。オーラル・ヒストリーとライフストーリーは今を生きる人間同士が過去に向かう点で同じだ。歴史学的歴史研究は過去を歴史過程の中で考える。生存の歴史は人の外に全体史が聳え立つ訳でなく、生きる中での相互交渉に存在する。これが歴史過程を考えるきっかけになる。

都倉氏は、戦時期の塾史編纂を目的とする「慶應義塾と戦争」アーカイブ・プロジェクトの経験から、オーラル・ヒストリーについて論じた。編纂の背景には、福沢の思想が如何に後世に語り継がれるか、「生誕120周年記念小泉信三展」で直面した戦時期の小泉塾長の「語りにくさ」をどのように評価するかという問題意識がある。アーカイブを作るために資料収集のほか、100件余りの聞き取りを行なった。収集資料には小泉塾長が寄せ書きした無数の署名日章旗、学生や卒業生への手紙が出てくる。聞き取りでは、戦中と戦後に学生が塾長宅を訪問する話、戦中に学生の身なりを注意する話、戦後に学生が戦犯になったら私が身代わりになるといった話等、小泉塾長のエピソードが溢れ出る。空襲による火傷で入院中の小泉塾長が昭和20年9月の卒業式で演説をしたという話も出てくるが、事実の確認がとれない。一方、戦後の学生や教職員による排斥運動の話は表れない。小泉塾長の多様な語られ方や語られないことを、文献資料と如何に結びつけ、慶應義塾の歴史に位置づけるか。戦中と戦後の社会的評価の変化を見据え、どう記述するか。オーラル・ヒストリーと文献資料の相互補完性、語りの時代的変容、同時代的事実の峻別の必要性が述べられた。

柳沢氏は、「オーラル・ヒストリーの現在と課題」研究会での討論から獲得した点を紹介した。論点は、文献調査との関係性、聞く側と聞かれる側の関係性である。聞かれる側には聞く側の関心事に答えるより大事なことがあり得る。両者の長い付き合いを通じ、相互の信頼度が変わる中での語りの変化をより広く許容すべきだとした。

小林氏は、ライフストーリー研究の社会学者として、「常にあるデータ」と「生成的データ」を分け、後者の生成現場のことが真剣に考えられるべきだと指摘した。

司会の有末氏は閉会の言葉で、過去30年で蓄積されたオーラル・ヒストリーの更なる発展と普及を訴えた。

歴史研究は過去をより深く理解する目的を持つ。事実の集積により、事象は鮮やかに甦る。聞き取りは資料収集と同じく、一つ一つの事実を得る手段である。どの語りにどんな意味があるか、何を社会に発信するか、事象の理解を追求して自ずと見えるのかもしれない。語りは生き物のようで脆く捉え難い。それでも硬直的に分析せず、複雑な過去を網羅的、重層的に捉えようと前進する。

戦争の時代と自由主義

加　賀　慶　彦

去る３月９日～16日の８日間にわたり慶應大阪シティキャンパスで催された、特別企画展『戦争の時代と大学』において、13日14時から２時間かけて「70年後に語る戦時下の学生時代、そして戦争」と題した座談会が開かれました。私は、司会を務める慶應義塾福沢研究センター准教授の都倉武之先輩から、関西在住ということもあってお誘いいただき、参加いたしました。

慶應義塾出身者で、自らの学徒出陣のご経験をお聞かせくださったのは、昭和19年三田会代表で、陸軍で内地勤務をされた神代忠男氏、海軍の零戦特攻で出撃するも生還された柳井和臣氏、海軍の人間魚雷・回天特攻訓練中に終戦を迎えた瀬川清氏の３名です。

まず、学徒出陣までの昭和14年から16年にかけての塾生生活を振り返ると、「本当に楽しかった」と三先輩が異口同音に仰られたことが非常に印象深く思われました。一般的に、昭和６年の満州事変以降、戦時下の生活と言えば、「暗い」「辛い」といったイメージがあろうかと思います。確かに、当時の塾生の平均像は現代よりずっと裕福な子弟の割合が高かったこともあるのかもしれませんが、そうした世相の中でも楽しみを見つけながら、「自由主義」の学風を満喫されていた様子がうかがえました。

しかし、学徒出陣後の体験談は、大変なご労苦や戦友の死といった悲しみが続き、特に、柳井氏の「東大出の戦友Ｙ君は、本当に文武両道、人格も立派で、間違いなく大臣になっていた。――もし、生きていれば」との言葉は、強く胸に迫りました。一方で、同氏から、「海軍で叩き込まれた『５分前精神』『仕事、任地、奥様の三つに惚れろ』といった言葉が、座右の銘になった」と聞き、海軍士官であった祖父が、生前、「軍人たる前に紳士たれ」と繰り返し私に話してくれたことと重なりました。

戦争体験というのは本当にいろいろで、一概に言えるものではない、しかし生き抜いてこそ語ることができるわけで、日本人、外国人問わず、戦傷病死された方々の無念は誠に言い尽くせないと思います。

そこで、質問をしました。「もし福沢先生が戦時中にご存命でしたら、どのように発言され、行動されたと思いますか？　一国の独立のために戦うべしと仰るのか、あるいは英米の技術、文化や政治制度、近代文明の素晴らしさに触れて自由主義の大切さを改めて説かれたでしょうか？」と質問したところ、神代氏から「たとえ福沢先生であったとしても、何か発言するのは難しく、もし自由主義的なことを言おうものなら、たちまち社会的に抹殺されてしまったのではないか」。続けて、「当時の小泉信三塾長でさえ、我々塾生を集めた自宅の私的な懇談会では戦争のあり方に疑問を示されていても、公式の場では戦地に征く塾生を叱咤激励して送り出さざるを得なかった。義塾を守るためにはどうしてもやむを得なかったのではないか」との答えがあり、時代の雰囲気がよく表れているように思いました。

また、「昨今の政治の流れの中で、安全保障法制や憲法第９条に焦点が当たっていますが、これからの若い世代に向けてメッセージを」と質問しました。神代氏からは「１人を殺すと犯罪者だが、戦争は上官の命令で100人を殺して英雄になる、本当に理不尽。しかし戦争はなくならない。なくせるとしたら人間の理性に頼るしかない」、瀬川氏からは「戦争は絶対に繰り返してはならない。そのために憲法は護らなければならない」。他方、柳井氏からは「人間にはそれぞれの考え方があり、それぞれの生活がある。そして、それぞれの誇りがある」ということで、いざというときは決意を持って立ち上がることを示唆されるようなお答えもございました。しかし、いずれにも共通するのは、「他者を尊重し」た上で「自己の考えを自由に持つ」という義塾の「独立自尊」の伝統であり、それが普遍（不変）のバックボーンになっておられるのだなと感じました。

つまるところ、戦争を抑止し、恒久平和を実現することとは、「自由」が絶対的に守られることと同義なのではないかと思います。社会の相互信頼のもとで、自由に思想し、自由に発言し、自由に学問し、自由に報道し、そして自分自身で自由にその是非を判断する――。そのためには、ひとえに『教育』の力が必要です。一人ひとりが尊厳を持って自由に生きられる社会、それこそが福沢先生の提言された「一身独立して一国独立する」を実現することに他ならないのではないでしょうか。

戦後70年を経て、戦時中の様子を直接うかがうことが次第に難しくなってきています。そうした中、今なお矍鑠と元気にされている大先輩方のお話をお聞きし、大変な感銘を受けました。そして、戦後、日本人が並々ならぬ努力を重ねて築き上げてきた自由主義や民主主義に基づく平和で豊かな暮らしを、次世代に引き継ぎ、世界に広めていくことの重要性を再認識する極めて貴重な機会でした。お話してくださった三先輩に深く御礼申し上げます。ありがとうございます。　　（塾員・平15政）

「慶應義塾と戦争」アーカイブ・プロジェクト活動報告

都　倉　武　之

2013年８月より始動した「慶應義塾と戦争」アーカイブ・プロジェクトでは、①実物資料の収集、②多様な記憶の収集、③学生情報のデータベース化、④資料公開の４点を柱として掲げて活動してきた。ここではこの１年の活動を報告する。

■「慶應義塾の昭和二十年」展の開催

2015年６月１日～８月６日（第１会場：図書館展示室）、７月１日～31日（第２会場：アート・スペース）の会期で開催した。空襲、戦死、終戦、疎開、動員、占領の６章立てで、昭和20年＝1945年の「終戦」を前後する時期の激動を、このプロジェクトで収集された資料を中心に紹介した。展示にあわせて前２回と同様の小冊子を作成した。今回の展示では、回天特攻で戦死した塾生塚本太郎が残した肉声、集団疎開を経験した幼稚舎生の葉書100枚以上の展示、戦後間もない塾内の様子を記録した映像などが特徴的な展示となった。報道等もあり、また会期末がオープンキャンパスにかかったこともあって、来場者は12000人を数えた。

■「戦争の時代と大学」展の開催

例年大阪シティキャンパスにおいて実施する福沢研究センター講座に代えて、2015年度は当プロジェクトの３回にわたる展覧会の総集編に当たる展覧会を開催した。会期は2016年３月９日～16日。これまでの展示とは異なるＡ４版の冊子を作成した。３月13日には義塾出身の３名の学徒出陣経験者を集めた座談会を開催し、80名余りの来場者があった。登壇者は神代忠男氏（昭和19年三田会代表）、瀬川清氏（元回天特攻要員、戦後は京大卒）、柳井和臣氏（神風特攻隊員として出撃するも帰投）の３氏（前頁に来場者による記事を掲載）。会期中の来場者はおよそ300名であったが、多くの情報が集まる貴重な機会となった。

■ 主な収集資料

当プロジェクトには、活動開始以来多数の資料が提供されており、その詳細は『三田評論』巻末に逐次掲載されている。ここではこの１年間で寄贈されたり入手した特徴ある資料を挙げるに留める。

佐々木正五関係資料（佐々木雅國氏寄贈）

昭和16年医学部卒で海軍伊号第四潜水艦軍医として真珠湾攻撃に参加した佐々木の軍服、鉢巻、日記等。真珠湾攻撃に参加した塾員は、軍医となった数名のみ知られている。計113点。

宮崎克實関係資料（宮﨑弘實氏寄贈）

宮崎（旧姓川原）はこれまでの戦没者名簿から名前が漏れていた戦没塾員で、昭和９年経済学部卒、20年５月臨時召集、公報では21年２月20日（戦友によれば同年３月末）満洲牡丹江省で戦病死。長男弘實氏が本籍地である大分県や厚生労働省、靖国神社等に請求した軍歴に関する資料及び戦友からの戦没状況に関する手紙等、本人の手によるものではないが、戦没にまつわる記録としては徹底した資料一式。計９点。

小林庸二関係資料（川合美津子氏寄贈）

小林は法律学科２年で学徒出陣。父は当時貴族院書記官長。家族宛の手紙が約30通残っており、その中には軍事郵便でありながら、現状にかなり批判的な言辞が見られ興味深い。また幹部候補生試験に不合格だった者の資料としても貴重。

海上自衛隊第１術科学校教育参考館所蔵資料の複写

同館には戦後近江一郎が特攻による戦死者の遺族を訪問して遺族の状況や残された記録類を確認し、遺影や遺書を収集した膨大な資料が整理保管されており、慶應義塾出身者の資料も多く含まれているため、その閲覧及び複写作業を行った。慶應義塾関係では21名の写真、遺書、自筆の手紙等が保管されていた。

■ 学生データベースの作成

昭和16年３月から昭和25年９月に卒業した高等教育機関の学生・生徒（入隊未復学、退学、死亡した者を含む）のデータベースの作成については本誌21号に平山勉氏による報告を掲載したが、この作業を継続している。三田で保管されている学籍資料は電子化を終え、次に医学部・医学専門部・看護婦養成所（信濃町）、藤原工業大学・工学部（矢上）、獣医畜産専門学校（志木）の学籍資料の電子化に着手する予定。

■ 資料データベースの構築

収集資料をインターネット上で公開するデータベースの構築作業を進めている。当初は2015年度内に一部を公開する予定であったが、福沢研究センターの移転などの関係から遅延しており、2016年度内には公開を開始したいと考えている。

大学部の誕生から 125 年
～記念行事の概要～

慶應義塾の高等教育機関として大学部が発足して、2015（平成27）年でちょうど125年が経過した。

1886（明治19）年ごろから「ユニヴハシチ」を構想し始めた福沢諭吉は、米国ハーバード大学総長エリオット（Charles William Eliot）に人選を依頼し、リスカム（William Shield Liscomb）、ドロッパーズ（Garrett Droppers）、ウィグモア（John Henry Wigmore）を、それぞれ文学科、理財科、法学科の主任教師として招聘し、1890（明治23）年に最初の学生59名（文学科20名・理財科30名・法律科9名）が入学した。

以後大学部の歴史は決して平坦ではなく、入学生数の伸び悩みから、1896（明治29）年には赤字を解消するために廃止論が浮上し、一旦は評議員会で決定をみるに至った。しかし、福沢は何としても維持すべく努力し、1898（明治31）年の学制改革では、幼稚舎から大学部までの一貫教育体制がほぼ出来上がった。

2015年度は大学部125年を記念して、大学、文学部、経済各部、法学部、商学部による様々な記念行事が行われた。主たるものは、以下の通りである。なお、職位は当時のもの。

■ 慶應義塾大学

・慶應義塾大学部開設125年記念式典・講演会
「福沢における『多事争論』と『官民調和』の相克」都倉武之（福沢研究センター准教授）
「Learning from Europe in the 21stCentury」嘉治佐保子（経済学部教授）
2015年10月24日（土）、三田演説館

■ 文学部

・文学部125年記念講演会・シンポジウム
記念講演会「グローバル化時代を迎えた日本の大学の中心は文学部だ」鈴木孝夫（名誉教授）
シンポジウム「文学部の将来像―日本の大学におけるリベラル・スタディーズの意義」日比谷潤子（国際基督大学学長）、小林章夫（上智大学前文学部長）、越川房子（早稲田大学文学学術院長・文学部長）、関根謙（文学部長）
2015年6月20日、三田キャンパス南校舎ホール
・ほか関連企画14件

■ 経済学部

・慶應義塾大学経済学部大学部理財科創設125年記念講演会

基調講演「慶應義塾の経済学と福沢諭吉」小室正紀（名誉教授）
講演会「慶應義塾大学経済学部の研究」細田衛士（経済学部教授）
「慶應義塾大学経済学部の国際化」コリン・マッケンジー（経済学部教授）
2015年9月14日、三田キャンパス南校舎ホール

■ 法学部

・慶應義塾大学法学部創設125年記念講演「日本、アジア、そして世界」
「ボーダレス時代の法的規律 ―国際私法の視点から」北沢安紀（法学部教授）
「西洋のアジア、東洋のアジア ―19世紀末の世界と同時代性」山本信人（法学部教授）
「何から何を守るのか ―日中間の安全保障環境」安田淳（法学部教授）
2015年10月25日、慶應大阪シティキャンパス
・法学部開設125年記念式典・講演会
「国際刑罰権の現状と課題」フィリップ・オステン（法学部教授）
「民主主義と独裁の歴史的起源―東南アジアを中心に」粕谷祐子（法学部教授）
「アメリカの音楽文化と人種構成」大和田俊之（法学部教授）
トークセッション
「戦後七十年を越えて―グローバル化の中の大学の役割と学問の自由」
2016年1月30日、三田キャンパス北館ホール

■ 商学部

・慶應義塾大学部創設125年記念商学部講演会
「仕事×サッカー日本代表×スポーツマーケティング―自分らしい仕事をみつけるために大切なこと―」野上宏志（日本サッカー協会マーケティング部部長）
2015年12月8日、三田キャンパス東館ホール
「ゲームの未来」襟川陽一（コーエーテクモホールディングス代表取締役社長）
2015年12月9日、日吉キャンパス来往舎

平成27年10月から平成28年３月までの間に、福沢研究センターに収蔵された主な資料を紹介します。多くの方々から貴重な資料をいただきながら、すべての資料をご紹介することができず申し訳ありません。（物故者敬称略）

福沢諭吉関係資料

■ 中野松三郎宛福沢諭吉書簡　　明治14（1881）年２月２日付　１面　　【購入】

神戸商業講習所長箕浦勝人の後任として、中野松三郎を推薦しようと考えていることを告げた書簡。ちょうどこの頃、福沢は国会開設をにらんで政府発行の新聞紙の編集を引き受けることになり、その準備をしていた。箕浦を招聘すると所長のポストがあくので、中野に声をかけたのであろう。本文には「内々」に申し上げるが、箕浦が神戸を去る事情が生じるので、その後任に「周旋」するとあり、「極て内々の義」なので神戸の朋友に文通するなどは「以の外の事」と述べている。この書簡は『福沢諭吉書簡集』（2001～３年、岩波書店）編纂時には所在がわからず、原本との校訂ができなかった。

名宛人の中野松三郎は旧中津藩士。明治12年から20年まで塾長を務めた浜野定四郎の甥にあたる。明治２年10月に慶應義塾に入塾。４年11月に旧藩主奥平家と士族たちの互助組織からの拠出により中津市学校が開校すると、教員として赴任した。この書簡の当時は、中津市学校の世話人を務めている。第七十八国立銀行の発起人のひとりでもあり、のち大分県会議員。西南戦争の際には、福沢が起草した西郷隆盛の処分に関する建白書に「中津士族同志総代」として名を連ね、猪飼麻次郎とともに京都の行在所に提出する役割を担った。

■ 服部鐘宛福沢諭吉書簡　　明治25（1892）年10月１日付　１巻　　【購入】

名宛人の服部鐘は、福沢諭吉の末姉。書簡は両人にとって姪にあたる「一」（いち）の病気療養に関するもの。一は両人の兄三之助の遺児で、幼くして父を亡くした後は祖母の福沢順に育てられた。明治３年順とともに上京し、諭吉のもとで暮らしていたが、７年に順が歿した後は鐘に引き取られ、のち中津に戻った。田尻竹次郎と結婚し、明治14年には長女が生まれて、以後22年までに五女を儲けた。しかし明治25年９月に婦人科系の病気に掛かり、療養生活を余儀なくされた。

当時の一の病気に関して服部鐘と諭吉の間で交わされた書簡が、これまでも７通知られていた。鐘からは福岡の病院に行き治療を試みたことや、中津では「帆足氏」に診てもらっていることなど病状が細かに報告され、諭吉からは栄養をつけるのが一番であると、頻りに為替で送金している。この書簡は今回初めて発見されたもので、ここでも牛乳、「ソップ」（スープ）、玉子などを用いるよう述べている。また９月11日付や13日付の書簡で、一を自宅ではなく留主居町の福沢宅（諭吉が17，８歳ごろから暮らした順の実家）に引き取り養生させるのがよいと述べていたが、この書簡でも留主居町の家に３畳か４畳半の一間を建て増しして、そこを一の部屋とすることを提案している。

■ 福沢諭吉加筆時事新報漫言「豊太閤記念祭」原稿　１巻　　【購入】

この原稿は巻子仕立てになっており、石河幹明による大正６（1917）年５月付の跋文がついている。それによれば、執筆者は時事新報の記者であった寺山啓介である。しかし前半部分は福沢がほぼ全体にわたって加筆し、後半部分は福沢が自ら執筆している。石河の跋文では掲載時期を明治30年３月中と記しているが、実際には明治31（1898）年４月５日で、『福沢諭吉全集』第16巻（再版1971年、岩波書店）295～６頁に収録されている。

時事新報社に勤務していた中村梅治という人物が、おそらくは校正係を務めていた折に、他人が起草し福沢が加筆訂正した社説や漫言の原稿をもらい受けていた。のちに人に請われて移譲したものがあり、それがリストとして残っていたが、この「豊太閤記念祭」もその中の１点であった。

主な動き

■ センターの仮移転

昨年秋、理事および管財部から図書館旧館の改修工事を実施するとの連絡が入り、急遽管財部とともに移転候補地の検討、再配置計画の立案、移転先工事を行い、12月21日に事務室を南館4階に、翌22日に南書庫の図書を南館7階に移転した。年が明けて1月8日に北書庫や地下の分室にあった図書・資料群を東館に、1月12日に分室の図書・資料群を同じく東館に移転した。資料の分散により、12月14日から改修工事終了までは資料の閲覧を休止する措置をとっている。なお、収蔵庫や展示室の資料群、地下の版木はそのままの状態となっているため、今後の検討課題となっている。

■ 資料集第2巻の刊行

慶應義塾創立150年を記念して編纂がはじまった『慶應義塾150年史資料集』基礎資料編の第2巻「教職員・教育体制資料集成」が3月31日に刊行された。第1部教職員情報では創立時から昭和18年度までに在籍した教職員、役職者、外国人教師、5,000名以上について、所属、担当科目、職位などのデータを収録、第2部教育体制資料では創立から昭和20年8月までの期間に制定された、大学や諸学校などにおける諸規則類を収録している。

■ 丸の内シティキャンパスでの講演会

12月3日、慶應丸の内シティキャンパスが主催する定例講演会「夕学五十講」において、都倉准教授が「戦後70年、『学生と戦争』を考える」と題して講演を行った。講演は元学徒兵の方々と「慶應義塾と戦争」アーカイブ・プロジェクトに関わった学生との対談形式で行われた。

■ 海外との交流

昨年7月から8月にかけて、韓国延世大学、梨花女子大学、高麗大学から研修生や研究チームの来訪が続いたが、年が明けてからも2月22日から3月5日まで、梨花女子大学大学院史学研究科より研修生5名を受け入れた。

■『近代日本研究』の刊行

2月29日に第32巻を刊行した。今回の特集は「演説館開館140年」とし、昭和女子大学の堀内教授からは建築の専門家の視点から論説をご執筆いただいた。

3月9日には第33巻の編集委員会を開催、7年にわたって（商）平野教授が務めた編集委員長は（文）井奥教授に引き継がれた。

■ 慶應大阪シティキャンパスでの特別企画展

例年、大阪では福沢に因んだ連続講座を開催してきたが、今年度は「戦争の時代と大学～「慶應義塾と戦争」アーカイブ・プロジェクト収集資料～」と題して3月9日～16日まで特別企画展を開催した。詳細は6・7頁参照。

■ 服部禮次郎記念基金によるワークショップの開催

3月11日、「東アジアの近代とアメリカ留学」と題するワークショップを開催した。これに先立ち、故服部禮次郎氏令夫人悦子様にはこれまでの活動をご報告するとともに、ワークショップにもご出席いただいた。詳細は2～4頁参照。

■ シンポジウムの開催

3月19日、日本オーラル・ヒストリー学会、三田社会学会との共催、社会学研究科後援によりシンポジウム「歴史と記憶とオーラルヒストリー」を北館ホールにて開催した。詳細は5頁参照。

■ 展示協力

- 9月28日～10月31日「福沢諭吉と日本の保険業」慶應義塾保険学会・慶應義塾図書館
- 1月30日～3月21日「福沢諭吉と大隈重信　～物語る交流×創造する未来～」福沢旧邸保存会（大分　福沢記念館）
- 2月11日～3月21日「大隈重信　福沢諭吉　～大隈さんと福沢先生　ふたりの意外なつながり～」佐賀市大隈記念館

■ 諸会議

＊平成27年度執行委員会（10月28日、11月12日、１月29日、３月８日）
＊平成27年度第２回運営委員会（10月21日）
＊平成27年度第３回運営委員会（３月９日）
＊平成27年度第２回福沢研究センター会議（１月13日）
＊小泉基金運営委員会（１月22日）
＊『近代日本研究』第33巻編集委員会（３月８日）

■ 人事

〈所　長〉 退任　岩谷十郎（法学部教授）　～10月31日
　　新任　米山光儀（教職課程センター教授）
　　11月１日～
〈副所長〉 新任　井奥成彦（文学部教授）　11月１日～
〈所　員〉 退任　有末　賢（法学部教授）　～３月31日
〈顧　問〉 退任　佐志　傅（元高等学校教諭）　～３月31日
〈事務局〉 退任　松岡李奈（非常勤嘱託）　～３月31日

■ 主な来往

以下、戦争プロジェクトに関連する聞き取り調査には（聞）を付す。

＊松永記念館からの資料返却対応（10月１日）
＊奥山篤信氏、寄託資料の件で来訪（10月２日）
＊塾員田村眞氏資料返却のため来訪（10月５日）
＊広島大学原田環氏、資料閲覧のため来訪（10月６日）
＊塾員近藤紀孝氏、猪股靖氏来訪（10月16日、１月10日）
＊塾員安井裕二郎氏、資料の件で来訪（３月９日、10月16日）
＊武山芳子氏、資料寄贈のため来訪（10月21日）
＊港区かたりべの会からの資料返却対応（10月26日）
＊神奈川大学内田青蔵教授とゼミ生、演説館を見学（10月27日）
＊塾員森田優子氏、日露戦争関係資料ほかを寄贈（10月29日）
＊昭和女子大学堀内正昭教授来訪（11月４日）
＊客員所員マリオン・ソシエ氏、資料閲覧のため来訪（11月５日）
＊佐賀市大隈記念館楢崎直子氏、展示会の件で来訪（11月５日、12月14日）
＊東京大学大学院植田展大氏、資料閲覧のため来訪（11月９、13日）
＊塾員河西宏和氏資料寄贈のため来訪（11月９日、３月24日）
＊清水洋二氏、戦没塾員清水昇氏関係資料を寄贈（11月９日）
＊オランダ首相、展示室を見学（11月10日）
＊NHK 矢野哲治氏、福翁自伝複製版を撮影（11月11日）
＊大阪工業大学上久保敏氏、資料閲覧のため来訪（11月18日）
＊法政大学笹川ゼミ、演説館を見学（11月30日）
＊福沢旧邸保存会浅原氏、展示会の件で来訪（11月30日、12月17日）
＊塾員山名愛三氏、資料を寄贈（12月３日）
＊大阪慶應倶楽部上田氏来訪（12月４日）
＊長崎歴史文化博物館からの資料返却対応（12月15日）
＊ピラミッドフィルム長谷川靖氏、岩田映理華氏資料撮影のため来訪（12月16日）
＊神奈川大学内田青蔵教授調査のため来訪（１月13日）
＊福沢旧邸保存会、大隈記念館への資料貸出（１月22日）、返却（３月28日）対応
＊愛知大学藤田佳久氏ほか３名来訪（１月22日）
＊神奈川県立金沢文庫梅沢恵氏来訪（１月29日）
＊塾員武田純三氏来訪（１月29日、３月28日）
＊塾員井上毅氏、伯父井上柳三氏の資料を寄贈（２月15日）
＊中津市長奥塚正典氏ほか２名来訪（２月17日）
＊塾員横山房子氏来訪（聞）（２月26日）
＊塾生新聞会の取材対応（３月10日）

■ 出張・見学

＊都倉、石田、聞き取り調査のため大阪、京都、名古屋（10月２～５日）
＊都倉、竹屋、全国大学史資料協議会2015年度総会・全国研究会に出席（10月７～９日）
＊都倉、横山、竹田行之氏旧蔵資料受取り事前調査（11月16日）
＊都倉、日本語学校理事長江副隆愛氏を訪問（11月19日）
＊西沢、リール大学で発表のためフランス（11月21～26日）
＊西沢、堀、小田部家目録作成のため中津（12月４～６日）
＊西沢、梨花女子大学での調査のため韓国（12月17～18日）
＊西沢、韓国女性史学会例会出席（12月19日）
＊西沢、竹屋、寄贈資料の下見・引取りのため中上川マリ氏宅を訪問（２月15、22日）
＊西沢、梨花女子大学での調査のため韓国（２月25～27日）
＊都倉、横山、慶應大阪シティキャンパス展示会のため大阪（３月７～17日）
＊都倉、港区役所会議に出席（３月17、22日）
＊米山、福沢旧邸保存会理事会のため中津（３月22日）
＊西沢、大分県公文書館、県立図書館郷土資料室で調査（３月29日）
＊西沢、福沢旧邸保存会評議員会のため中津（３月30日）

■ 講師派遣

＊都倉、全国大学史資料協議会総会にて講演：「『慶應義塾と戦争』を巡る資料と研究」（10月８日）
＊都倉、大学部開設125年記念式典で講演：「福沢における『多事争論』と『官民調和』の相克」（10月24日）
＊西沢、福沢記念文明塾で講演：「近代家族のゆくえ―福沢諭吉の家族論から考える」（10月31日）
＊都倉、三田キャムパスクラブで講演：「ジャーナリストとしての福沢諭吉」（11月７日）
＊西沢、坂城町文化センターで講演：「信州と福沢氏―これまでの研究成果をふまえて」（11月８日）
＊都倉、戦没塾員追悼会で講演：「慶應義塾と戦争」（11月14日）
＊西沢、メディアセンター学内研修会で講演：「大学アーカイブズの二つの側面」（11月20日）
＊西沢、リール大学で講演：「レオン・ド・ロニと福沢諭吉―ロニアルバムの手紙から」（11月23日）
＊都倉、法政大学史センターシンポジウムで基調講演：「学徒出陣の記憶を記録する」（11月23日）
＊都倉、丸の内シティキャンパス夕学五十講で講演：「戦後70年、「学生と戦争」を考える」（12月３日）
＊（法）小川原所員、第54回福沢諭吉記念全国高等学校弁論大会で審査員（12月４日）
＊西沢、SFC 中・高等部の学部説明会で講義（12月９日）
＊西沢、通信教育課程入学希望者への説明会：「福沢諭吉と新しい時代」（12月12日）
＊西沢、秋田三田会で講演：「今ふり返る福沢諭吉と慶應義塾」（１月26日）
＊（文）井奥所員、福沢先生116回忌法要時記念講演会で講演：「福沢諭吉が尊敬した人物―濱口梧陵」（２月３日）
＊都倉、大阪慶應倶楽部で講演：「大阪と福沢諭吉　蔵屋敷から大阪慶應倶楽部まで」（２月13日）
＊都倉、葛飾三田会で講演：「福沢・慶應、大隈・早稲田」（３月５日）
＊都倉、シンポジウム「歴史と記憶とオーラル・ヒストリー」で報告（３月19日）
＊西沢、福沢諭吉協会土曜セミナーで講演：「レオン・ド・ロニと福沢諭吉―ロニアルバムの手紙から」（３月26日）

スタッフ一覧

所　　長	米山　光儀	教職課程センター教授
副 所 長	平野　　隆	商学部教授
副 所 長	井奥　成彦	文学部教授
専任所員	西沢　直子	副所長、福沢研究センター教授
	都倉　武之	福沢研究センター准教授
所　　員	池田　幸弘	経済学部教授
（兼運営委員）	岩谷　十郎	法学部教授
	澤田　達男	理工学部教授
	武林　　亨	医学部教授
	林　　温	文学部教授
	山内　慶太	看護医療学部教授
所　　員	有末　　賢	法学部教授
	上野　大輔	文学部助教
	梅津　光弘	商学部准教授
	大久保忠宗	普通部教諭
	太田　昭子	法学部教授
	大塚　　彰	志木高等学校教諭
	小川原正道	法学部教授
	加藤　三明	幼稚舎教諭
	Knaup, Hans-Joachim	経済学部教授
	斎藤　秀彦	横浜初等部教諭
	末木　孝典	高等学校教諭
	馬場　国博	湘南藤沢中・高教諭
	Ballhatchet, Helen	経済学部教授
	宮内　　環	経済学部准教授
	結城　大佑	女子高等学校教諭

顧　　問	岩﨑　　弘	元幼稚舎教諭
	小泉　　仰	名誉教授
	小室　正紀	同
	坂井　達朗	同
	佐志　　傳	元高等学校教諭
	寺崎　　修	名誉教授
	松崎　欣一	名誉教諭

客員所員	安西　敏三	甲南大学教授
	飯田　泰三	島根県立大学副学長
	井田　進也	大妻女子大学名誉教授
	區　　建英	新潟国際情報大学教授
	片岡　　豊	白鷗大学教授
	我部　政男	山梨学院大学名誉教授
	川崎　　勝	
	佐藤　正幸	山梨大学名誉教授
	白井　堯子	千葉県立衛生短期大学名誉教授
	進藤　咲子	東京女子大学名誉教授
	曽野　　洋	四天王寺大学教授
	高木　不二	大妻女子大学短期大学部名誉教授
	西田　　毅	同志社大学名誉教授
	平石　直昭	帝京大学教授
	田中　康雄	元群馬県立文書館館長
	平山　　洋	静岡県立大学助教
	藤原　亮一	田園調布学園大学教授
	前坊　　洋	
	松沢　弘陽	
	松田宏一郎	立教大学教授
	宮村　治雄	成蹊大学教授
	森川　英正	
	山田　央子	青山学院大学教授
	林　　宗元	韓国関東大学校名誉教授
	Craig, Albert	ハーバード大学名誉教授
	Saucier, Marion	フランス国立東洋言語文化大学教授
	Nguyen thi Hanh Thuc	

研究嘱託	巫　　碧秀	
	石井寿美世	
	吉岡　　拓	
	堀　　和孝	
	山根　秋乃	
	柄越　祥子	
	大庭　裕介	

事 務 局	酒井　明夫	事務長
	竹屋　早月	主　務
	印東　史子	事務嘱託
	池ヶ谷麻衣	同
	高田真規子	派遣職員
	澁沢　彩佳	非常勤嘱託
	松岡　李奈	同

他に、『慶應義塾150年史資料集』調査員、18名

（3月30日現在）

慶應義塾福沢研究センター通信　第24号

Newsletter of
Fukuzawa Memorial Center for
Modern Japanese Studies,
Keio University

発行日　2016年4月30日　（年2回刊）
編　集
発　行　慶應義塾福沢研究センター
〒108-8345　東京都港区三田2−15−45
電　話　03−5427−1604
http://www.fmc.keio.ac.jp/
印　刷　（有）梅沢印刷所